地いきの人といっしょに

今日は早起きをした。お父さんといっしょに地いきのクリーンデーに参加するからだ。きのう、

「まさしも明日手伝えよ。」

とお父さんに言われて、軽い気持ちで引き受けた。でも、朝から太陽の日ざしがきびしいし、しかもねむたいし、引き受けたことをぼくはこうかいした。集会所の前には、もう何人かが集まってきていた。お父さんやお母さんぐらいの人や、おじいさんやおばあさんのような人もいた。ほとんど知らない人ばかりで、ますます早起きして参加したことがいやになってきた。

お父さんは地いきの役員で、クリーンデーのたん当をしているということは知っていたが、ぼくは今まで参加したことはなかった。五、六人のグループに分かれて、みぞそうじをしたり、落ちているゴミを集めたり、草引きをしたりするそうだ。

ぼくはお父さんとみぞそうじをすることになった。お父さんといっしょで少しほっとした。同じグループのおじいさんが、

「小学生やのに、感心な子やなあ。」

と、ぼくのことをほめてくれた。それからおじいさんは作業をしながら、この町の昔のことを教えてくれた。今とちがってこのあたりは、田んぼや畑がいっぱいあったこ

と。牛をかっている家から、牛がにげ出し、たくさんのおとなの人が牛を追いかけてつかまえたこと。公園のはしにある大きなさくらの木は、おじいさんが子どものころに植えた木の一本であること。次々に出てくるおじいさんの話は、とても楽しかった。おじいさんはにこにこした顔で、

「この町にはいっぱい思い出がつまっているんや。」

と言っていた。初(はじ)めて話をするおじいさんだけど、なんだか前から知っていた人のような感じがしてきた。

むこうのほうで、

「だれか手伝って。」

という声がしたので、ぼくはよんでいたおばさんの方にすぐに走っていった。おばさんは、みぞのふたを持ち上げて、中をそうじしようとしていたが、ふたが重くて持ち上がらなかったようだ。おばさんの顔には、大つぶのあせが流れていた。ぼくは、おばさんといっしょに、力をこめてふたを持ち上げて動かした。おばさんはとっても喜(よろこ)んで、軍(ぐん)手をした手でぼくの手にあく手をしてきた。ぼくもぎゅっとにぎりかえした。

二時間ぐらいでクリーンデーは終わった。家に帰っておそい朝ごはんを食べた。そして宿題の日記に、朝のできごとを書くことにした。いっぱい書きたいことがある。